

都市における閉領域とその周辺環境との関係性について

—参道という観点からの考察—

Study on relationship between urban enclosure and its surrounding
from the viewpoint of Japanese traditional approaching road to sacred area

学籍番号 47116728

氏名 加藤 大樹 (Kato, Daiki)

指導教員 大野 秀敏 教授

1. 序論

東京の都市空間における多数の閉領域の存在を指摘する研究は少なくないが、閉領域と周辺環境との関係性を論じた研究は見られない。閉領域は閉鎖的であるとはいえその異質さと巨大さゆえに、何らかの形で周辺環境へと影響を及ぼしているのではないかと考えられる。そこで本研究では参道に着目する。なぜなら、参道は日本古来より異質な閉じた領域である社寺境内と都市空間との関係を築き、門前町のようなにぎわいをもつ魅力的な都市空間を形成してきたからである。

本研究ではまず、原広司による空間の領域論や楨文彦による東京の都市論などを参考とし、「現代の東京の都市空間に存在する閉領域は社寺参道に類する道空間をもつ」という仮定を導いた。このような道空間を社寺参道と区別するために〈参道〉と表記する。この仮定の下に、〈参道〉という観点から東京の閉領域とその周辺環境との関係性を分析し、明らかにすることが本研究の目的である。これらの関係性を解明することは閉領域を異質なものとして隔離するのではなく、それを都市の個性と捉え、都市の資源として有効に活用していくための一助となるのである。

2. 社寺参道の空間的様相

〈参道〉という観点から東京の都市空間における閉領域とその周辺環境との関係性を分析するにあたり、社寺参道の意義や空間的様相を、社寺参道に関する既往の論考を分析することにより明らかにした。表1がその結果であり、連想性・重層性・指向性を空間の参道的様相であると定義して、次章における〈参道〉の事例を分析する際の観点とした。

表1 参道の空間的様相

概念的空間性	意義	俗域から聖域への空間的・心理的遷移の誘導 進行きによる信仰の誘発			
	性質	連想性	重層性	指向性	
物理的空間性	構成の手法	分節 連続性	軸と降り 明暗の変化	到達度の暗示 疎密の変化	見えかくれ 街道からの分岐
	構成の要素	道 人工物 自然	高低差 門 植物	屈曲 一般建築物 水	幅 橋 表層の質感 物語

3. 東京の閉領域と〈参道〉

本研究で東京の閉領域として研究対象とするものは、大規模な敷地を有する61か所の都市施設である。そしてその中でも幹線道路からの接続道路をもち、ある程度の閉鎖性をもった領域を空間的指標を設定して抽出した。それらの実地調査を通して、その接続道路に閉領域との関係性がみられた11か所を〈参道〉をもつ可能性の高い閉領域として詳細な事例分析の対象とした。ここでの関係性は、接続道路における商店街の形成、樹木による演出、建物による配慮、資本の集中的投入であるとした。

これらそれぞれの事例においてその道空間の閉領域との関係性にみられる参道的様相を分析した。また、それぞれの道空間の様相の形成過程も合わせて調査した。

「商店街の形成」が閉領域へと至る道空間にみられた閉領域の事例は、早稲田大学、東京芸術大学、青山霊園、日赤医療センターである。これらの商店街を構成する店舗の業種を調査したところ、早稲田大学では印刷・製本店や不動産業、東京芸術大学ではギャラリー、青山霊園では墓石店や花屋、日赤医療センターでは薬局というように閉領域と関連する機能をもつ商店が比較的多くみられることがわかった。特に早稲田大学における商店街では、大学生協との提携関係や街路の装飾など、大学との関係性を表す要素がいたるところにみられた。

「樹木による演出」が閉領域へと至る道空間にみられた閉領域の事例は、明治神宮外苑絵画館、浜町公園、教育の森公園、上智大学、法政大学である。これらを現地調査したところ閉領域へと至る道には明らかに意図的な並木による演出がみられた。これらの形成過程を調査すると、そこに違いがみられた。明治神宮外苑絵画館と浜町公園はヴィスタ景観の形成という建物や道空間の意図的な演出を目的として閉領域と一体的に計画されていた。教育の森公園は戦災復興事業として都市の緑をつなげるといった意図の下に閉領域と道空間を一体的にとらえた形家具が実現したものであった。また、上智大学と法政大学においては、外濠の空間に〈参道〉としての可能性を見出したそれぞれの学生が主体的に道空間の演出を行って形成された道空間であった。

「建物による配慮」が閉領域へと至る道

空間にみられた閉領域の事例は、国立劇場である。この閉領域へ至る道では多くの標識が見られ、道空間と閉領域の関係性がうかがえる。特筆すべきは国立劇場近隣の再開発計画において、国立劇場に配慮した建築計画なされているということである。この計画では、公開空地がとられ、そこに国立劇へと至る演出的な道空間が形成されているのである。

「資本の集中的投入」が閉領域へと至る道空間にみられた閉領域の事例は、代々木公園である。これはパルコの公園通りにおける商業戦略を意味する。パルコは開店当時、人通りの少なかった代々木公園へと至る道空間の〈参道〉としての可能性を発見した。そして、代々木公園の集客効果やイメージを活用して、人の流れを強化するために、「公園通り」と道を改称したり、劇場群を整備したりと、代々木公園への接続道路を戦略的に〈参道〉化する試みを行っていったのである。そしてこの〈参道〉化の戦略により、人々を公園通りへと引きつけることに成功し、公園通りは若者文化の発信地としての個性を獲得したのである。その結果公園通りは若者文化の発信地としての個性をもつようになった。

事例として取り上げた閉領域へと至る道空間には、いずれも閉領域との強い関係性がみてとれた。他にも道につけられた名称や、標識、歴史的背景などの調査を行うことで、これらの道空間における閉領域を連想させる要素を多面的に確認できた。指向性や重層性をもつ道空間も多数みられたことから、これらを都市における閉領域の〈参道〉であるととらえることができ、その存在を実証することができた。

4 <参道>の空間的様相の一般化

東京の閉領域の周辺における<参道>の存在とその個別の形成要因が明らかになった。本章ではこれらの事例を通観し<参道>を一般化して考えることで、閉領域と周辺環境との関係性を解明する。

4-1 <参道>の形成過程

<参道>の形成過程は「計画型」と「発見型」に類別することができる(図1)。

「計画型」では<参道>は閉領域への「到達経路の計画的演出」のための道空間として計画される。これは、ヴィスタ景観のように意図的な演出を目的として閉領域と一体的に計画された<参道>である。

「発見型」の「到達経路の加算的演出」は「計画型」と同様に道空間の演出であるが、それが道路計画と閉領域が一体的に考えられているというのではなく、閉領域への接続道路の計画後、閉領域や周辺の関係者がそこに<参道>としての可能性を発見し、既存の道路に演出を加えていった<参道>である。「関連機能の近接」は閉領域の機能と類似する機能をもつものが集まることで閉領域への連想性をもつ<参道>が形成されるのである。「誘引性の強化」は、閉領域を都市の資源とみなした主体によってそこへの接続道路の<参道>としての可能性が発見され、その道空間に人々を誘引するために閉領域を活用した道空間の<参

道>化が戦略的に行われたものである。

4-2 <参道>の様相

<参道>は商店や樹木などの構成要素が、幹線道路から正門へと至る道に沿って集約されることによって形成されるため、「集約性」をもつ空間である。そしてこの集約は、閉領域による商業投機性や閉領域へ至るための空間演出などという閉領域が周囲へ及ぼす影響によって生じるものであり、この影響は正門へと至る道へ最も大きく及ぶことから、正門から幹線道路までの道には線形に要素が集約し、卓越した道空間が形成される。このようにして形成された<参道>は根本的に幹線道路とは異なる原理の下に形成されているために独自の様相をもつのである。この独自の様相としての景観の連続性によって、<参道>の「線形性」は顕在化するのである。そして、道空間への閉領域に関連する要素の集約が<参道>の連想性・指向性・重層性という様相を生む。これらは、<参道>の「前室性」として考えることができる。これらの様相はいずれも<参道>の空間が閉領域に供するものであることを示しており、主室的である閉領域に対して<参道>は前室的なのである。以上に挙げた三つの<参道>の様相を図式化すると図2のように表せる。この図にも表すように、「集約性」が「線型性」と「前室性」を生じさせると考えられる。

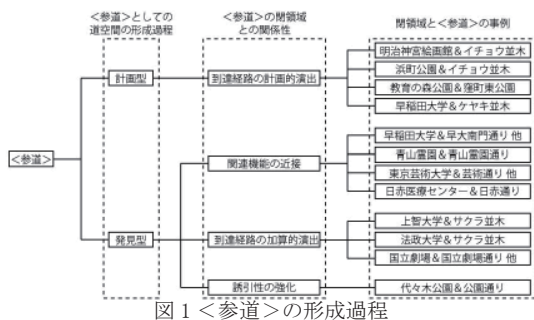


図1 <参道>の形成過程

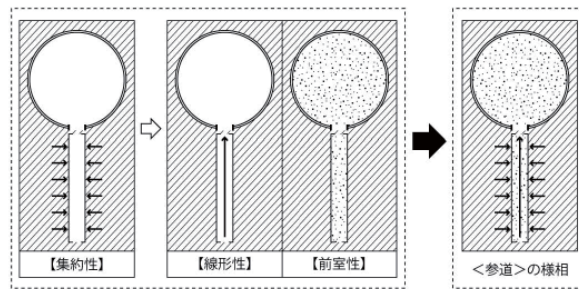


図2 <参道>の様相

4-3 <参道>の効用

<参道>の様相であるとした「前室性」と「線型性」の都市空間における効用を閉領域と<参道>の事例を通して分析した。

「前室性」の都市空間における効用とは、個性的な都市空間の創出である。個性とは様々であるが、商店街の業種構成比に閉領域の個性が反映されたり、閉領域に個性的な人々が集まることで個性的な様相をもつ境界が形成されたり、閉領域へ至る道の演出によってその場所が個性的な場所になったりなどという事例がみられた。そして、<参道>は様々な用途をもつ閉領域内部の様相とつながりがあることから、周辺の都市空間に個性を生み、都市に多様性をもたらしするのである（図3）。

<参道>の「線形性」は「前室性」によって生じた閉領域に由来する周辺環境の個性を広範囲に波及する効用をもつ。この「線形性」の効用を商業戦略として利用したのがパルコである。また、並木の<参道>は魅力的な緑の空間となっており、「線形性」は、人々が緑の空間の魅力を享受する機会を増やしている。一般に閉領域と周辺との関係性で、商業性、緑環境などの点で恩恵を受けるのは入口付近の都市空間のみであるが、そこへ至る道に<参道>が形成されることで、その「線形性」により個性的な空間の恩恵を受けることのできる都市の範囲を拡大しているのである（図4）。

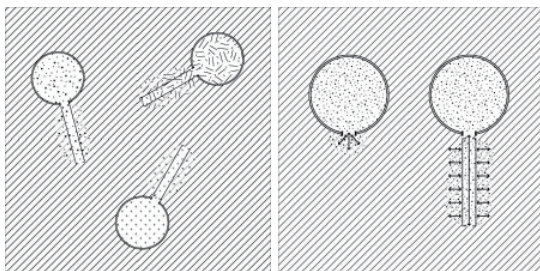


図3 「前室性」の効用

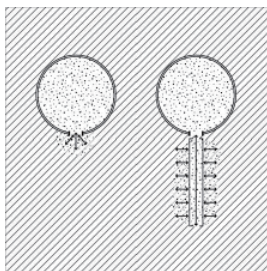


図4 「線形性」の効用

5. 結論

都市における閉領域とその周辺環境の関係性を結論付けるものとして「参道」モデルを以下に提示する。

- ・ <参道>は閉領域の周辺環境において、閉領域への「到達経路の計画的演出」「関連機能の近接」「到達経路の加算的演出」「誘引性の強化」により形成される。
 - ・ これらの現象は閉領域の門へと至る道空間に集約して生じる。
 - ・ 閉領域の周辺環境における<参道>の空間の様相は「集約性」をもち、さらに「集約性」は「前室性」と「線形性」を誘発する。
 - ・ <参道>の「前室性」は閉領域の個性を、その境界を越えて周辺環境に表出させる。閉領域の個性に応じて周辺環境の個性も異なり、都市空間に多様性をもたらし。
 - ・ <参道>の「線形性」は「前室性」によって表出した閉領域の個性を広域に波及し、その個性による受益範囲を伸張する。
- 以下、<参道>モデルについて述べる。
- ・ <参道>モデルは東京都心部における閉領域と<参道>の事例調査により導かれた。
 - ・ <参道>モデルは形成過程、様相、効用の諸相における閉領域とその周辺環境の関係性を示す。
 - ・ <参道>モデルは都市における閉領域とその周辺環境との関係性を理解するための手法のひとつである。

<参道>モデルは閉領域を都市の資源として有効活用するための都市デザインを思考する動機となる。そしてその思考に、閉領域と道空間を一連の空間としてとらえることが生む可能性という重要な視座を提供するのである。